







洪水の発生を防ぐためには、洪水緩和機能を有する黒部川上流の水源林を適切に管理していくことが、今後安定的に農業用水を確保するために必要です。

-農業用水水源地域保全対策事業-



水護神社の由来とたいまつ祭りの起源について

(昭和四十五年十月宮腰由則編述)

氾濫する黒部川のあらみず(洪水)を鎮めこわみず(灌漑用水)の護り神として往古よりこの村に伝わるたいまつ祭りは神秘的な年中行事として、今日もなお近郷近在の衆目を集めている。

この由来について昭和初期村の最古老(西島亀次翁)の口述によれば、その昔豪雨のため黒部川が大洪水となり随所に氾濫してこの村も流失寸前の水勢に村人どもも、もはや手の施すすべもなく台地にたたずみ水煙り立つ濁流を無念に見入るばかりなり、このとき一人のたくましいいばんどりを着た

男がカヤケの方位(この神社より百五十米上流崖下)より洪水の中に勢いをきき分け仁王立ちに水勢を制し、やがて水の勢いは次第に西方にかわり、村は水害からまぬがれることができたと言う。翌朝洪水が次第におさまり水煙りもすっかり晴れ上がり村人どもの関心を集めた仁王立ちの姿は、今この神社の御神体であらせられる黒御影の自然石に化されていたと言う。これは神の化身であることから近郷近在のものどもは神社を

築き、ここにあらたかに安置したもので以来今日まで幾度の黒部川の洪水にもこの村は水害がなかったと言い伝えられている。

さらにまた、村人が難儀する灌漑用水の守り神として敬神のまこと捧げ春秋おこなわれる祭りのうち秋の(十月十三日旧九月九日の宵)お祭りは洪水からの無事を利水の恩恵を感謝し来年まで水神に用水を一時お返しすると言う意味で行われた、たいまつ行列は、お返しする川の流れを表ししも氏神様より取り入れ口のこの神社に奉納されるもので神秘的な笛や太鼓とともに御神火の列が異様に衆目を集めている。







































































































